愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－　第39号　2014.3　17-32

日英博覧会における日本の展示

The Exhibition of Japan in *Japan British Exhibition of 1910*

楠　元　町　子
KUSUMOTO Machiko

キーワード：日英博覧会、展示、貿易

１．はじめに

万国博覧会は、「世界的な技術見本市、技術の成果の場」[1]であり、庶民にとってはさまざまな物を実際に体験し、異文化に触れる機会として重要な役割を果たしてきた。本論文は、日英博覧会における日本の展示を分析することにより、日本の産業の進展情況や国際競争力を明らかにし、博覧会が日本の貿易や日本のイメージ形成に与えた影響の考察を試みるものである。

1910(明治43)年日本の貿易相手国として、輸出は北米合衆国、清国、フランス、イギリス、香港、英領インド、輸入は英領インド、イギリス、清国、北米合衆国、ドイツ、蘭領インドの順であり[2]、イギリスは経済上日本にとって極めて重要な地位を占めていた。さらに、日本は、1910（明治43）年８月韓国併合、1911（明治44）年２月に関税自主権の完全回復を実現し、同年７月に日英同盟を継続更新した。欧米諸国の日本への共感と理解を極めて必要とした時期に開催されたのが、日英博覧会である。

日英博覧会は1910(明治43)年５月14日から10月29日までイギリスのロンドンで開催された。日英博覧会に対しては、英国側の主催者がイムレ・キラルフィー（Imre Kiralfy 1845-1919）という民間人であったことや、英国の展示が日本の展示の３分の１に過ぎず、英国企業の出展も少なかったたことで、実質上は日本博覧会であったのではないか[3]、また日本の相撲や演芸等のエキゾチックな面に注目が集まっただけであるという批判[4]がある。一方博覧会に参加した企業や大阪府などが、展示品への観客の反応を分析し、製品改良を図るなど貿易上一定の効果はあったとするという指摘[5]もある。しかし、日本の展示内容が実際どのようなものであり、その評価、効果について論じたものはあまりない。

日英博覧会に関する主なる研究としては、日英博覧会を小村寿太郎の重要な外交戦略と位置づけ、その開催経緯を検証した河村の論文[6]や日本大博覧会計画や日英博覧会の内容と日英両国の反応を考察した伊藤の著書[7]、日英博覧会とアイヌ人の関わりを検証した宮武の論文[8]がある。

本稿は、日本の展示の実態を、明治政府の事務報告書、貿易資料や当時の新聞記事、英国の

公式報告等を検討する事により、具体的な展示品の中身や陳列方法、日英博覧会後の日本の輸出額の変化、英国の報告書による評価などを明らかにし、日英博覧会が日本の貿易や日本のイメージ形成にどのような効果をもたらしたのか考察したい。

２．日英博覧会

１）開催経緯と会場

1908（明治41）年１月、在英大使小村寿太郎に英仏博覧会委員長イムレ・キラルフィー氏から英仏博覧会終了後、その設備を利用して、1909（明治42）年に日英博覧会を開催しようという提案があった。小村は、日英同盟継続の大切な時期であることから考慮が必要であると日本政府に伝えた。その後、小村が外務大臣として入閣した第二次桂太郎内閣は、1908（明治41）年10月16日の閣議において「日英同盟は帝国外交の骨髄たることを確認し」[9]と表現し、日英関係強化のためにも日英博覧会が必要であると判断し、開設を決定した。日本政府は、在英大使館を通じてイムレ・キラルフィーを代表とする博覧会会社と交渉を開始し、1909（明治42）年３月31日駐英加藤高明大使が日本側を代表して契約書に調印し、日英博覧会が正式に成立した[10]。

日英博覧会（Japan-British Exhibition）は、英国側はコンノート親王（Arthur William Patrick Albert 1850-1942）が、日本側は伏見宮貞愛親王（1858-1923）が名誉総裁にそれぞれ就任して、1910(明治43)年５月14日から同年10月29日まで、ロンドン西郊シェファーズブッシュで開催された。

開閉時間は、５月14日から８月21日までは午前11時開場午後11時閉場、８月22日から10月15日まで午前10時30分開場午後10時30分閉場、10月16日より12月28日は午前10時開場午後10時閉場であった。「夜間は会場内十万個の電燈が点じ、白塗りの欄干に反射して泉水溝渠に映じたる光景は真に不夜城の如く美観実に名状すべからず」[11]であった。期間中入場者数は約850万人であった。

日英博覧会は、1908（明治41）年開設の英仏博覧会の際使用した地所及び陳列館を使用し、会場敷地の面積は約168,000坪、又出品陳列館は鉄骨に依り防火の設備完全なる構造を有するもの20棟より成り、総面積21,670坪であった。日本は20棟の陳列館中９棟其面積6,741坪を日本出品部に充て而して其内３棟此面積1,155坪は売店に充てた。即ち本邦出品部は陳列館の棟敷に付いては約半分、其面積では約３分の１を占め、この外5,670坪の日本庭園建造することになった。

日本の出品陳列坪数をこれまでの万国博覧会と比較してみると、日英博覧会6,741坪に対して、1893（明治26）年市俄古万国博覧会は1,881坪、1900（明治33）年巴里万国博覧会は1,226坪、1904(明治37)年聖路易万国博覧会3,672坪であった[12]。これまでの万国博覧会と比較して、極めて広大な陳列面積を得たことが分かる。

2）日本政府の出品方針

日本政府は日英博覧会開催の第一の目的を日英両国間の和親関係を一層牢固にするためとし、出品方針を以下のようにした[13]。

「本博覧会は一般の博覧会に対するが如く我文化、富源及産業の状態を展示して通商貿易の拡張に力を致すに止まらず特に文教の沿革、古美術、各産業の発達、兵制、交通其の他諸制度の沿革並びに風俗の変遷に関する歴史的出品を為し我国運発展の淵源由来を明らかにする方針」とし、出品は普通商品、指定出品、官廳出品、婦人出品、新美術品、古美術品及び風俗に関する出品の七部門に大別した。つまり、日英博覧会は単に通商貿易の拡大のみを目的とせず、日本の風俗・文化・産業を広くヨーロッパに伝える目的を持っていた。

さらに当時の日英貿易の状態を考え、博覧会に出品する人に次のことを通達した。「該博覧会に依りて我文化の発展、富源及産業の進歩を表彰し因て以て通商貿易の拡張を計るらむとする趣旨に外ならず抑英国は其の総輸入額六十五億円を算し且自由貿易園なるに拘わらず本邦品の輸入せらるるもの僅に二千五百万円に過ぎさるは畢竟我物産を汎ねく公示するの機会乏かりしに起因するものにして該博覧会は対英貿易上逸すべからさるの好機なる」[14]と述べた。さらに出品について具体的に次のような注意点を挙げた。「同業の物品は多数人各自出品することを避け同業者協同一致して地方特産物の特長を発揮することを主眼とすへし」、「出品の陳列はその光彩、色澤、形状等の配合に留意し斬新の意匠を凝らし観覧人の注意を喚起するにつとむへし。」[15]

陳列方法については、過去の万国博覧会において繰り返し反省されてきた点、売店主義であり中等以下の品質や出品点数が多く日本の嗜好に拘りすぎたであったこと[16]、日本の展示が他国の展示と比較して展示方法が稚拙であり、商品の価格が高いことや実用性がないこと[17]から、次のような配慮を出品人に求めた[18]。「観覧人の注意を喚起する為出品物の陳列装飾に付適当の意匠を施し」、「高尚に種種の色物を配合し又は形状を取合する等の設計を立てて此に伴うて数量を定めること」、特に日英博覧会はこれまでの海外での博覧会と比較して、破格の陳列面積を得たことからも出品物の数量について、「出品人は先ず如何なる陳列装飾を為すかを考慮しその設計に基きて数量を定め出願せらるるを要す。」

すなわち従来の反省を踏まえて、展示方法を工夫すること、陳列のデザイン性を重視すること、陳列装飾の設計により展示数量を決定するように指導した。また事務局より一定の場所を受け、自己の費用で斬新な陳列箱や壮大な特別室を建設し、その中に優秀な装飾を施し、卓抜優良な出品をする自営出品も認めた[19]。

3．日本の貿易と展示品

1）日本の貿易

日本の明治時代の貿易は、高橋の研究によれば次の３段階に区分できる[20]。第一次的段階（大体明治15、16年ごろまで）は、近代工業品は輸入に依存し、輸出は主として農産鉱産などの原産品であり、生糸、茶、海産物、陶磁器、漆器などであった。

第二次的段階（大体明治16～26,27年ごろ）は、もっぱら輸入に依存していた商品についても、漸次国内で自給する新工業が生成発達し始め、主なるものは紡績、綿布、メリヤス類、マッチ、ランプ、石鹸其の他の洋品雑貨であった。生糸、茶、米などの国際的分業に有利な産業は急速に発達し、石炭、銅の生産も輸出を増進した。

第三次的段階（大体明治27,8年以降）は、維新以降移植した近代工業が、その国内自給中心（輸入代替）の時代から海外輸出時代に転入し、近代的紡績業や洋品雑貨などの新工業品が有力な輸出品となった。国内は狭小であり国内の消費購買力は当時まだ貧弱であり、国内相手のみでは消費財工業の発達余地は少なからず限られていた。

従って日英博覧会は紡績や雑貨、農産物の貿易を拡大する絶好のチャンスであった。「20世紀初頭イギリスは世界貿易の中心であり、工業生産力面で新興工業国に追いつかれあるいは追い抜かれながらも、イギリスは圧倒的な海運力および金融力にもとづいてなお世界貿易の中心に位置していた。」[21]

万国博覧会は、日本の製品を海外の人々に直接紹介し、貿易拡大を図る貴重な機会であった。日本政府は展示を通じて、日本の製品の使用方法や日本人の日常生活、日本の近代化のイメージ形成を図り、日英博覧会においても紡績や雑貨、農産物、陶磁器などの輸出拡大を目指し、楽器や真珠、化学品などの出品にもチャレンジしていた。

2）日本の主な展示品

日英博覧会における日本の展示は、教育、美術、心芸、機械、電気、土木及通運、農業、園芸、林業・狩獲・漁業・野生収穫物の採取、飲食品、採鉱及冶金、装飾品及家具、織物、化学工業、雑工業、経済、殖民、軍備の18の区部門に分類され、９の陳列館に展示された。

日本の陳列館は、二号館（日本工業館）、二号館Ａ（日本園芸館）、三号館及三号Ａ館（日本景色館）、十二号館（日本歴史館）、十三号館（日本織物館）、二十一号館の日本部（日本富源館）、二十三号館（東洋館）、二十四号館（日本政府各省出品館）、二十六号館（日英美術館）、四十七号館（日本婦人製作品、教育、山林、美術工芸館）であった。庭園は、甲号（日本平和園）、乙号（日本浮島園）二ヶ所に設営された。喫茶店は、三十六号館の中に台湾喫茶店、日本庭園内に日本喫茶店が設けられ、緑茶、烏龍茶の普及が図られた[22]。

普通万国博覧会では、主催国の意向により会場の陳列場所が設定され、参同諸国は単にその指定に従って自国の出品をしているに過ぎないが、日英博覧会は総て両国当事者の契約に準拠して決定された。日本の主な展示品については以下の表にまとめた。

表１　陳列館と日本の主な展示品

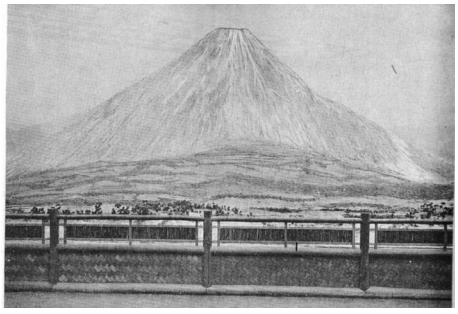
陳列館	展示面積	日本の主な展示品
第２号館	340坪	（売店）　開易社岩本庄吉（漆器及木材製品）、小林善兵衛（金属器）、世継合名会社（象牙彫刻品）、松木平吉（木版印刷、絵画）鈴木吉五郎（玩具、陶磁器）、神奈川県出願人（金属器、陶磁器、植木盆栽、アルバム）石川県出願人（陶器、陶磁器、漆器、刺繍造花）、滋賀県出願人（銅器、木綿縮、蚊帳）寺澤留四郎（陶磁器）谷口與十郎（陶磁器）、川村又助（陶器）
第２号館Ａ	131坪	（売店）　横浜植木株式会社（植木盆栽）
第３号館	684坪	（官廳出品）司法省（奈良監獄模型、厳島模型）、大蔵省臨時建築部（横浜及神戸港設備に関する図面及説明書）、鉄道院（国有鉄道沿線風景風俗写真額、帝国鉄道救済組合及統計圓類） （売店）　審美書院（木版印刷物）、安藤重兵衛（七宝）、大阪売店組合（陶器、銅器、提灯、扇子、貴金属品、銅器、運道具、筆墨算盤、帽子、玩具、グラブ洗粉、コッピー・ブック）、売店組合事務所、宮川恒助（陶磁器）、加藤友太郎（陶磁器）藤井美豊（象眼品）
第３号館Ａ	85坪	鉄道院壁面
第12号館	652坪	（風俗の変遷を示す出品）：上古、奈良朝、平安朝、藤原、源平及足利末、鎌倉、足利、桃山、徳川、現代に分けて歴史人形の陳列
第13号館 織物館	1448坪	（普通商品）絹織物、綿織物、毛織物、麻織物、交織物、染物、刺繍、布帛製品、絲・組物・編み物、「レース類」、「ハンカチーフ」、毛皮製品、緞通、花莚、屏風・衝立、木製品、写真及写真器機、紙類及提灯・日傘・電燈瓦斯「ランプ」笠等其の他の紙製品・蔦布、帽子及園扇、文房具・薫香・算盤、袋物、化粧品及小間物、洋傘及洋傘柄、油類、燐寸、煙火、刷毛、調帯、革及革製品、造花、玩具、木版 （自営出品）東京出品同盟会、京都出品協賛会、三井物産株式会社、京都出品協賛会、川島甚兵衛、京都絹絲紡績株式会社、大阪「モスリン」業者団体、大阪府緞通同業組合、福島県絹織物業者団体、山中清七等 （官廳出品）花莚検査所、印刷局
第21号館 富源館	743坪	（普通商品）清酒、麦酒、味醂、醤油、菓子、飴、炭酸水、素麺、葛、鉱物標本、日本産特有動物標本 （指定出品）鉱業、農業（米麦）、水産業（鰛巾著網模型、鰤大敷網模型、浜名湖模型、真珠養殖場模型、貝類、珊瑚樹、皮革、魚油）飲食品 （自営出品）大日本蠶絲会、日本缶詰株式会社、茶業組合中央会議所、千葉県醤油業者団体、醤油業者団体、大日本麦酒株式会社、灘五郷酒造業者 （官廳出品）農務局、蚕業講習所、農事試験所及生糸検査所、水産局及水産講習所、鉱山局、地質調査所及製鉄所、醸造試験所
第23号館	287坪	台湾総督府、韓国統監府、関東都督府及南満州鉄道株式会社の出品
第24号館 政府出品館	287坪	（官廳出品）陸軍省、海軍省、逓信省、内務省、商船学校、伝染病研究所、日本赤十字社の出品、国際交通に関する出品
第26号館	803坪	（古美術品）浮世絵、絵画、仏画、彫刻、染織、蒔絵、武具、古代建築の模型 （官廳出品）印刷局及造幣局の出品
第47号館	1599坪	（普通商品）陶磁器、瑠璃製品、七賓、漆器、金・銀・銅・錫「アンチモニー」等の金属製品箔、玉・石・牙・介・甲等の製品、菱稈・藤等の諸細工、帽子、玩具、造花、弦線、船燈、「ランプ」口金、医療・理化学、製図等の諸器機・度量衡品、鳥毛剥製品、化学薬品、楽器、学術・活版、図書、出版物、運動用具、懐炉及懐炉灰、乳母車、草履「スルッパ」の類 （指定出品）教育及山林狩猟の出品、商務局、工務局、工業試験所の出品、東京市及大阪市出品、公私立諸学校の教育出品物中初等教育及中学程度に属する児童生徒の成績品写真等 （婦人出品）婦人著書、儀式用衣服、遊戯品、茶道具、化粧道具、製作品 （自営出品）日本郵船株式会社、三菱合資会社、帝国製帽株式会社、日本楽器製造会社、株式会社審美書院、安藤重兵衛、御木本幸吉、鈴木政吉等

（農商務省『日英博覧会事務局事務報告上』明治45年、144-463頁、826-830頁。農商務省『日英博覧会事務局事務報告下』明治45年、538-598頁。より作成）

表１から当時の日本のあらゆる産業が出展していた事が分かる。そのなかには、現在の日本を代表する企業の出展も数多くみられる。「1880年代半ばより始まる日本近代経済成長の特色は、近代産業と在来産業が相互補完的に発展したこと、輸出を経済成長のエンジンにしていたことである。」[23] 20世紀初頭に開催された日英博覧会において、在来産業と近代産業の物品がどのように展示され、英国で評価されたのか次に示したい。

３）在来産業の展示―生糸・米・醤油・茶―

生糸は19世紀末から20世紀初頭において、「わが国の輸出額の約30%、常に第一位を占める重要輸出品であり外貨獲得のための戦略的輸出品であった。」[24]その地位は1930年代に人絹が発明されるまで揺るがなかった。そのため政府は生糸の展示に特に力を入れた。第21号館（JAPANESE PALACE OF NATURAL RESOURCES）に大日本蠶絲組合が出展した生糸で作られた富士山は、「背景と相俟って一幅の画かと怪しまれ殆ど生糸製とは覚えず、八朶の峯頭千歳不滅の雪より實氷瘤、裾野の雑木林に至るまで日本国産の随一をもて日本大一峯を写し出したり。」[25]この展示は英国人の目を引き以下のように大変な注目を集めた。

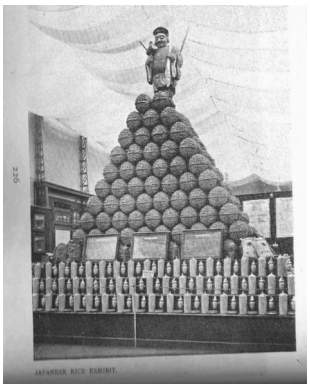


（写真１　JAPANISE SILK EXHIBT）

「博覧会の来訪者は、絹で作られた立派な富士山の模型に深い感銘を受けていた。これは、日本の養蚕業者・製造業者協会が展示したもので、日本では絹産業が重要な位置を占めていることを示すためのものであった。蚕の繭と生糸の展示物は260を超えており、この数から日本では上は皇室から、下は人里離れた田舎に住む最も身分の低い農民まで、かなりの割合の国民がこの国家的産業に従事していることが証明された。様々な養蚕中心地から多種多様な繭と生糸が展示され、多くの英国人絹物商の注目を集めていた。」[26]

さらに生糸の品質を保つための政府の取組を紹介していた。「国立生糸検査所の設備と作業の展示もあった。この検査所では、実質的にすべての輸出用生糸を慎重に検査して格付けすることにより、品質の劣る生糸が日本から発送されるのを防ぐとともに、最高級品の生産を促進することも目的としている。」[27]

米も開港以来日本の輸出品目の上位を占めていたが、次第にその地位が低下していた。政府は、「米麦類の如きは其の性質上外観無趣味にして視線を引くに足らさるか故に畳積陳列をなし他の官廳出品に属する田園模型をこれに配しその生産の順序状況を知らしめ」[28]、米の輸出拡大を図った。



（写真２　JAPANESE RICE EXHIBIT）

このような政府の展示方法は、英国でも高く評価された。「日

本は米を作り、米を食べる国という状況にあることから、必然的に稲作の実例を示す秀逸かつ印象的な展示を行うため、全力を尽くすことになった。特に注目を集めた物は、非常に芸術的に作られ中身がぎっしり詰められた俵を積んだ大きな山であった。こうした展示用の俵を作るため、日本の大量の稲わらと一緒に、専門の職人がわざわざ日本から呼び寄せられた。俵の山のてっぺんには、日本の七福神の一つで富の象徴である大黒の人形が置かれていた。その展示スペースの周りには多数の瓶が陳列され、その中には脱穀ならびに精白された米、大麦、小麦、豆など、様々な種類の農産物が詰まっていた。」[29]

醤油は日本固有の伝統的調味料であり、これまでの万国博覧会でも紹介に務めてきた結果、米国で売れ始めていたが[30]、英国ではまだその味が認知されておらず、ほとんど輸出されていなかった。「草色ペンキ塗布張屋根の吾妻屋及杉皮屋根の台所の二棟を設けこの所に必要なる諸道具を備付夫婦と丁稚女中に扮せる人形五個を配置して醤油使用の実況を示し、（中略）出品は全部試売の目的を以てロンドンに於て著名なるホワイトシー会社飲食部に売約したり。」[31]日本の日常生活の中でどのように醤油が使われているか示した醤油の展示は以下のように評された[32]。

「醤油の出展者は80を超えていた。醤油は、西洋では『soy（大豆）』という呼び名のほうが知られており、大麦の粗挽き粉を灰になるまで焼いたものと、茹でた豆、酵母、水、塩を混ぜて発酵させたものを圧搾して作る一種のソースであり、東洋では調理で最も広く使われている。当時、すでに一部の西洋人の間では、スープの風味付けに気に入られて使われていた。最高賞を受けたのは、濱口合名会社、田中玄蕃、茂木七左衛門、木佐平治という千葉県からの出展者であった。千葉県からは他にも多数のメーカーが出展し、兵庫県、三重県、愛知県、岡山県、香川県からもそれぞれいくつかの醤油メーカーが出展していて、その展示品は、秀逸なものとして高く評価されていた。」

茶の展示については「滋養物を扱ったこの手の展示は、かなり設置が難しいのであるが、展示スペースや家や模型の助けを借りて最も芸術的に配置されており、関連産業の情報も、地図やグラフ、図表、刊行物を用いてどのような産物なのか十分に説明されていたというのが一般的な受け入れられ方であった。」[33]

4）近代産業―楽器・医療・真珠・麦酒・綿製品―

第47号館（JAPANESE PALACE OF VARIED DUSTRIES AND EDUCATION）は、日英博覧会開場において日本最大の展示面積1,199坪あり、大部分が様々な産業の地方自治体および個人の出品者によって占められ、日本で製造されているあらゆる製品が展示されていた。一方で教育省や山林学事務局による展覧品および婦人出品によって、日本の近代化を示す展示品が多くあった。

これらの展示品について、英国の公式報告は次のように評価した[34]。左側のウイング（47号館）は全部、日本の出展で占められており、芸術的な宝物であふれていた。教育に関するセク

ションや、最も興味深い日本女性の作品展示があり、陶磁器の壮大なコレクションには、日本の主要企業や窯業の中心地からの展示物も含まれていた。美しい漆器、日本の宝飾品、象牙細工、鼈甲細工が数多く展示され、林業とスポーツのセクションには、日本の最も有名な産業によるサンプルが置かれていた。

楽器については、「おそらく、西洋人来訪者を最も驚かせたのは、日本で製作されたバイオリン、ピアノ、オルガンなどの西洋楽器の素晴らしい展示だったであろう。三味線や琴など、日本古来の楽器もいろいろあったが、最高賞を受けたのは、オルガンとピアノを出展した日本楽器製造株式会社と、バイオリンを出展した名古屋の鈴木政吉であった。」[35]

手術器具や科学計器、玩具、運動競技用器具の優れた展示があり、それらの展示品には造花が豊富に使われ、陳列に魅力と相加的効果を与えていた。旅行者として日本を訪問すれば自然に楽しむことができる大きな美が反映されていた[36]。

養殖真珠は、「天然真珠と養殖真珠のどちらも美しく配置されており、その展示には独創的な工夫がなされていた。素晴らしい輝きを放つ様々な大きさの真珠約800個（天然真珠と養殖真珠の両方）をはめ込んだ韓国の戦扇のレプリカが展示されていた。」[37] と紹介され、最も関心を引いた展示物であると評された。真珠養殖に関する『カタログ』数万部、出品の軍配團扇絵葉書一万枚を配布するなどの努力もあり、農務省は次のような効果があったと報告している。「売約高は予定額を超過し将来欧州諸国に対する販売拡張に脾益する所少なからず。」[38]

さらにこの建物の他の展示物について、「化学製品、様々な種類の玩具、帽子、懐炉、ランプの笠、ガラスおよびガラス製品、日傘などが挙げられる。実際、この建物内には、日本で製造されている、考えられるかぎりの品物がほとんど置かれ、適切な方法で陳列されていた。」[39] 日本の総力を上げた取り組みが感じられた。

第13号館（JAPANESE TEXTILE PALACE）の展示品について、「綿製品の展示は素晴らしく、日本の繊維産業に新しい光を投げかけたと欧州人の目には映った。特に大阪紡績会社が展示した綿ネルは、その秀でた品質によって注目を集めていた。和歌山県の紀州ネル商社、和歌山織布株式会社、および第一綿ネル株式会社が展示した同様の品揃え、並びに大阪織物会社が展示した優れた品質の綿ちりめんは、とくに人目を引いていた。日本では比較的新しい産業である紡毛織物の展示スペースも設けられていた。考えられるすべての織り方による麻織物と混紡織物も多数展示されており、繊維産業の展示の価値を大いに高めていた。日本は昔から繊維産業で有名だったのである。」[40]

さらに第13号館には西洋由来の食品に果敢に挑戦した品物が展示されていた。麦酒は、「花車形木造の陳列台を作り屋根上部に太陽を脊にしたる三尺の恵比寿神を置き柱及擬真珠付欄干は朱塗、屋根は鐵色漆塗となし陳列台は上は飾樽を陳列し其の上に五種の麦酒を園環三段に陳列した。」[41]

このような麦酒の展示に対しては、「日本麦酒株式会社によって、非常に芸術的な展示スペースが用意された。この会社は、最近、日本の最大級のビール醸造会社がいくつか合併してでき

たもので、この大会社が醸造した様々なブランドのビールが展示されていた。日本では近年、ビールが非常に広く消費されるようになり、今では大量のビールが日本から送り出されている。」[42]

４．日本のイメージ―伝統と近代化―

１）日本喫茶店と台湾喫茶店―日本文化と植民地台湾の誇示―

最も日本を代表する製品であるお茶は、第13号館に展示され、英国の公式報告書に次のように記載された。「日本の産業の中で最も重要な位置を占めている製品の展示があった。日本の茶室の形に作られた展示スペースには、様々なお茶（緑茶、紅茶、磚茶）を用いた美しい装飾が施されていた。お茶を飲む習慣は、日本では昔から続いており、それに関連した礼儀作法も日本ではまだ見られている。日本人の生活において、お茶を飲むことはとても重要な役割を果たしているため、家の建築だけでなく、芸術や文学においても、いたるところで、その影響の痕跡が見られる。日本のお茶を紹介するため、中央茶業組合が『浮島の庭』に日本式の茶室を建て、そこでは日本の流儀に従って来訪者にお茶が振る舞われた。」[43]日本人にとって、お茶は飲料品としての価値だけでなく、日本の文化の形成に深く係っていることを指摘している。

1894（明治27）年日清戦争の勝利後、日本の領土となった台湾は、海外の博覧会で度々展示されてきた。特に日本と異なる風習を全面に出した台湾喫茶店は、烏龍茶の販売拡大とともに、西洋と同様に植民地を持つ国というイメージ形成のためにも重要な役割を担っていた。

台湾日日報の記者は、日本喫茶店と台湾喫茶店を比較して次のような記事[44]を掲載した。「日英博覧会場に日英の喫茶店が都合27ある内24は英国側でしかもライオン会社の独占、３店だけが日本であった。日本喫茶店は茶業組合の緑茶喫茶店と『日本村』内の日本喫茶店と台湾の烏龍茶喫茶店と三軒である。茶業組合のは日本の茶座敷式で店前に日本的庭園を設置し二三の亭も構らへて之に毬燈を点じ給仕の英国婦人には（二三名居たるが如し）絹更紗の華美な着物を着せ紫メリンスの袴を穿かせ中々優美に仕立ててあるが惜しい哉位置の選定が悪かったのと喫茶所が多く屋外で雨勝の倫敦には不適当なりし大いに寂寞としていた。」

それに対し、「台湾喫茶店は英仏博覧会の時大きな料理店であった建物の西半分を借り受け、三方に赤き鳥居を設け柱等は台湾式に赤く塗りたて天井は藤の花房を以て装飾し軒には毬燈を点ずる等思い切った飾りつけをなし且つカーペットを始め屏風等も高価な品を用いたから見るから堂々として居る店内及びヴェランダには五百余の卓子を排列し、妙齢の英国婦人五十人程（外に日本婦人三人）に華美な友禅木綿縮を着し甲斐々々しく周旋していた。」

英国人の来店を増やすために、烏龍茶以外にも珈琲やラムネ、簡単な鳥獣肉の料理を出したり、喫茶店で茶を買った来客には小さい綿繻珍で造った信玄袋入の烏龍茶と数枚の絵はがきを景品に出したりした。「喫茶料は他のライオン喫茶店より高価であるから下等社会は入らず、来る者はいずれも上中等社会であるから烏龍茶の嗜好を倫敦市民に喚起させる効能は頗る大なるものであろう。」[45]

上記のように販売に工夫を凝らした台湾茶に対して、英国の評価は次のようであった。「今では台湾で非常に大量のお茶が生産され輸出され、高い評価を受けつつある。場内にあった台湾風の茶室では、台湾で生産されたウーロン茶が英国人来訪者に大いに気に入られていた。このお茶の紹介が大成功であったため、この国の様々な有力会社が、西洋で販売を行うための代理店の申し出に応じている、というのは喜ばしいことである。」[46]

台湾日日報も、台湾喫茶店の成果を誇こり、「台湾喫茶店に至りては日英博中の最成功者にして入場者、売上高に於て三十有余の日英喫茶店を凌駕し為に従来支那茶として取り扱われたる台湾烏龍茶の声価を高めて之を独立せしめ英国内に新たなる販路を開ける。」[47]と報じている。

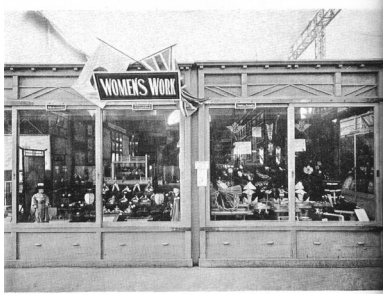
2）婦人出品―日本女性による素晴らしい展示―

欧米の女性と同様に社会貢献に励み、活躍している日本女性の姿を示すために設けられたのが婦人出品のセクションであった。日本政府は、「婦人出品」募集の目的を古来からの日本女性の真の姿を表明することにありとし、次のように通達した。「婦人出品は本邦夫人現時の情態を表示するのみならす古来夫人の社会上の地位並に事業を示す為教育、慈善、救済、風俗改良等に関する婦人経営事業の成績及婦人の製作品等を募集するの目的を以て特に選定したる品種及出品に限り出品せしることとなし。」[48]

婦人出品は、英国でも「おそらく博覧会全体において最も関心を引いたセクションの一つ」と評され、展示内容が詳細に説明された[49]。ここでは、日本における女性の活動に関連した物が、包括的かつ全面的に展示されていた。幼稚園から大学まで、様々な学年の女学校生徒が作成した品を展示することにより、日本人女性に施されている教育の範囲と程度が明確となっていた。磁器、織物、調度品その他の製造関連の物など、様々な産業において日本人女性がこれまで成し遂げてきたものを示す展示品も多数あった。また、社会運動に関連した女性の様々な活動を説明するスペースも設けられていた。例として、赤十字社の篤志看護婦人会、日本女子教育協会、日本禁酒婦人連盟などの仕事が挙げられる。この展示を構成しているどの品も女性の作品であることから、極めて興味深い展示となっていた。

「日本女性のセクションは、女性ができること、および女性がしてきたことを示す素晴らしい実例展示であふれていた。」と、日本の女性が歴史上活躍してきたことに着目していた。

WORKS BY JAPANESE WOMEN ARTISTS.



（写真３　SECTION FOR JAPANESE WOMAN'S WORK）

「日本では女性に参政権はないが、国の歴史全体を通して、女性は国政に大きな影響を及ぼしていたからである。極めて素晴らしい日本の和歌のいくつかは、女性によって書かれており、現在の皇后は、歌人としてその能力が広く認められている。」[50]

さらに「美術工芸については、レース編み、金細工、銀細工、刺しゅう、ならびに錦織の絶妙な見本が展示されていた。日本の女性が使っている楽器の展示や、生け花の実演もあった。また、有名な茶道についても、何らかの展示があった。茶道が昔から女性教育において果たしてきた役割は、決して些細なものではない。欧州の女性が喜んでいたのは、繊細な優美さを備え、実用的でも芸術的でもある化粧道具や、日本の女性が作った、重厚な刺しゅうのある立派な現代的衣装、ならびに、日本女性が散文や詩の分野で成し遂げられるものを示した写真展示とコレクションであった。」[51]「婦人出品」のセクションは、日本の女性の地位が、欧米で思われているように決して低くなく、工芸、芸術、文学の分野において素晴らしい才能を発揮していることを英国人に示す効果があった。

5．輸出品に対する効果

日英博覧会以後の日本の輸出品の変化を表２、３にまとめた。

表２　日本の主な輸出品と金額　（単位　千円、％）

項目	1910年	構成比（％）	1911年	構成比（％）	1912年	構成比（％）	1912年の1910年比伸率（％）
輸出貿易総額	458,429	100	447,434	100	526,982	100	14.9
貿易品細目							
生糸	130,831	28.5	128,875	28.8	150,321	28.5	14.9
綿織物	20,463	4.5	19,680	4.4	25,761	4.9	25.9
帽子	816	0.2	1,971	0.4	4,842	0.9	493.4
鈕釦	1,410	0.3	1,990	0.4	2,233	0.4	58.4
メリヤス製品	7,023	1.5	6,794	1.5	8,985	1.7	27.9
機械及同部分品	1,442	0.3	1,672	0.4	2,620	0.5	81.7
水産物	7,495	1.6	7,469	1.7	10,073	1.9	34.4
玩具	1,498	0.3	1,889	0.4	1,898	0.4	26.7
米	5,870	1.3	3,941	0.9	4,368	0.8	△25.6
醤油	1,007	0.2	888	0.2	889	0.2	△11.7
緑茶	13,410	2.9	13,733	3.1	12,850	2.4	△4.2
麦酒	979	0.2	656	0.1	723	0.1	△26.1
陶磁器	5,514	1.2	5,378	1.2	5,452	1.0	△1.1
石炭	16,301	3.6	17,990	4.0	20,285	3.8	24.4

（『明治四十三年外国貿易総覧』大蔵省主税局、『明治四十四年外国貿易総覧』大蔵省主税局、『明治四十五年大正元年外国貿易総覧』大蔵省主税局より作成）

表３　日本から英国への主な輸出品と金額（単位　千円、％）

項目	1910年	構成比（％）	1911年	構成比（％）	1912年	構成比（％）	1913年	構成比（％）	1910年の1913年比伸率(％)
輸出貿易総額	25,781	100	23,824	100	29,792	100	32,869	100	27.5
貿易品細目									
生糸	280	1.1	346	1.5	269	0.9	675	2.1	141.1
絹織物	6,213	24.1	6,433	27.0	4,664	15.7	7,664	23.3	23.3
メリヤス製品	56	0.2	120	0.5	131	0.4	152	0.5	171.4
帽子	44	0.1	64	0.3	186	0.6	61	0.2	38.6
釦釦	397	1.5	549	2.3	431	1.4	965	2.9	143.1
缶詰食物	23	0.1	278	1.2	783	2.6	473	1.4	1956.5
醤油	1	－	1	－	4	－	1	－	0
緑茶	10	－	0.1	－	10	－	12	－	20.0
米	466	1.8	287	1.2	79	0.3	1	－	△99.8
陶磁器	318	1.2	334	1.4	376	1.3	299	0.9	△6.0
石炭	9	－	20	－	147	0.5	104	0.3	1055.6

（『明治四十三年外国貿易概覧』大蔵省主税局、『明治四十四年外国貿易概覧』大蔵省主税局、『明治四十五年大正元年外国貿易概覧』大蔵省主税局、『大正二年外国貿易概覧』大蔵省主税局より作成）

日英博覧会が開催された1910（明治43）年の日本の輸出貿易総額は４億５千８百万円で、その内訳では生糸、絹織物、メリヤス製品、帽子、釦釦の繊維や服飾関連が１億６千万円に上り、約35％のシェアを占めていた。２年後の1912（明治45大正元）年は輸出貿易総額が５億２千７百万円まで増加し、２年間で約15％増加した。この間の繊維・服飾関連の輸出額も約３千２百万円増加し、伸び率は約20％に達した。対英国向け輸出においても、1910(明治43)年から1913(大正２)年の３年間で、輸出額が約２千６百万円から約３千３百万円へ約27％と大きく伸び、その中心は絹織物や生糸など繊維・服飾関係で３年間で約36％の大きな伸びとなった。日英博覧会後の輸出貿易全体でみると繊維以外では、機械、水産物、玩具、石炭などが24％から82％と高い伸びを示し、対英国向けは缶詰食品や石炭の輸出が好調だったことが伺える。増加した品目はすべて日英博覧会における重要な展示品であり、貿易輸出額の推移からも、日英博覧会が日本製品の輸出の増加とりわけ、対英国輸出拡大を図る絶好の好機との日本側の思惑通りにその後の貿易発展に貢献するところが大であった。

1912（明治45年大正元）年『外国貿易概覧』は、醤油が前年に比べ増加した原因を次のように分析している。醤油について数量は減少したが価格が増加した要因として、「従来本品の香気に対して兎角忌野の威を抱きし外人さへも近頃にては却て固有の香気として味うものあるに至りしより自然上等品の売行きを増せし結果なり。」[52]さらに日本文化を欧米に伝えるべく、開港以降積極的に輸出されていた陶磁器は東洋的な神秘感が高い評価を受けていた。陶磁器は、「英独等の欧州向けは前年の日英博覧会を初めみらん博覧会等の広告に因りて販路を拡張したる。」[53]と、日英博覧会が貿易拡大に効果があったと述べている。

６．おわりに

タイムズは1910（明治43）年７月19日「新旧日本」という記事で、平均的イギリス人に日本人をどう思っているか言ってくれと求めたら次のように答えると述べている。「戦士としてはすばらしいが、仕事の相手としてはいただけない。」[54] 日本人に対しては、日露戦争に勝利した勇敢さを称えたが、商取引のパートナーとしては信頼されていなかった。

日英博覧会については、ノース・チャイナ・ヘラルドが1910(明治43)年７月30日の記事で、日本の新聞が確認した２つの事実「博覧会は失敗だった。イギリスの製造会社は出品を取りやめた。」を挙げ、その理由として次の２点を指摘した[55]。第１に「日本が満州において行使せんと主張している諸権利は現実の主権にしか匹敵しないもので、イギリスで理解されているような『機会均等』にそぐわないという見解を抱いたのだ。」第２に日本政府が新関税について「イギリスは自由貿易政策をとっているが故に、対英特別取決めは不可能と率直に表明した。」ことにイギリスの民衆が驚いたのではないかという考えを述べている。

つまり、1910年７月の段階で、英国人は日本の満州進出と新関税に不満を抱いており、その結果、日英博覧会に興味を持てないのだとしている。

The World's Work は「ロンドンの日本」という記事[56]で、日本が世界の市場の中で商業的に優位に立とうと奮闘しており、「日英博覧会にて、精力的な若い国の成長における印象的な実物教育が見られる。」と述べ、「世界の勢力となろうと決意し、あまりに急速に進歩したため、古い国々は、今ではこの新しいライバルに対する現在の自国の地位を維持するのに苦労している。」と指摘している。

1912年の日英貿易の輸出について、神戸新聞日報は前年度と比べて絹織物及生糸屑糸類、鈕釦類、木材、陶磁器などが大幅の増加したことを述べ、「本邦輸出品は十年よりは著しく増加せるに反し最近三年間は殆んど居据りに近きも先ず順勢に進みつつありと謂うを得べし」[57]と結論している。

日本は日英博覧会の展示において、商品を富士山、大黒の人形、恵比寿神など日本を象徴する物や日本の四季を表す桜やもみじの造花とともに展示することにより、日本という国の文化や精神を表現しようと務めた。

明治政府は日本が近代化を遂げ、国力を高めるためには、当時の主要な輸出品目であった生糸の品質向上と輸出拡大が極めて重要であると考えていた。輸出増加で獲得した外貨で資源を買い、同時に海外の優れた技術を手に入れることで、新たな交易の機会を得ようとしていた。日英博覧会はまさに、日本の優れた商品と近代化された文化を海外に示す絶好の機会であり、今回この論文で示した通り、その後の海外輸出総額や、対英輸出額が増大したことから、明治政府の日英博覧会に込めた貿易拡大、国富の増加の思いは達成されたと評価できると思われる。

注

1　吉田光邦『改訂版万国博覧会―技術文明史的に』NHKブックス、1985年、24頁。
2　『明治四十三年外国貿易概覧』大蔵省主税局、1912（明治45）年、21頁。
3　「日英博の半面」『台湾日日新報』1910（明治43）年７月13日。
4　「日英博の教訓」『萬朝報』1910（明治43）年７月７日。
5　國雄行「一九一〇年日英博覧会について」『神奈川県立博物館研究報告人文科学』第22号1996年、78頁。
6　河村一夫「明治四十三年開催の日英博覧会について」（上）『政治経済史学』1981年６月28-38頁、同（中）1981年11月32-43頁、同（下）1982年３月18-26頁。
7　伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年。
8　宮武公夫「黄色仮面のオイディプス：アイヌと日英博覧会」『北海道大学文学研究科紀要』第115号2005年、21-58頁。
9　「日英博覧会ニ関スル閣議決定書」1908（明治41）年10月16日、『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』（一）外交史料館所蔵。
10　永山定富『海外博覧会本邦参同史料（第６偏）』フジミ書房1997年、46頁。
11　田中湄人「日英博覧会大観」『太陽』第16巻第９号、1910（明治43）年、37頁。
12　「英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件」（三）３門15類２項、外交史料館所蔵。
13　農商務省『日英博覧会事務局事務報告』上、1912（明治45）年、122頁。
14　同上153-154頁。
15　同上154頁。
16　筆者稿「万国博覧会に見る明治政府の国際戦略―1902年ハノイ博覧会と1904年セントルイス博覧会を中心に―」『愛知淑徳大学論集―文学部・文学研究科篇―』第37号、2012年、113頁。
17　筆者稿「セントルイス万博における日本の展示とその評価」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第２号、2007年、146頁。
18　前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、222頁。
19　同上457頁。
20　高橋亀吉『日本近代経済発達史第３巻』東洋経済新報社1977年、190-192頁参照。
21　『日本経済史第５巻　産業化の時代（下）』岩波書店1990年、83頁。
22　前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、97-98頁。
23　前掲『日本経済史第５巻　産業化の時代（下）』127頁。
24　同上102頁。
25　前掲「日英博覧会大観」34頁。
26　*Official Report of the Japan British Exhibition,1910,at the Great White City, Shepherd's Bush,London ,The Japan-British Exhibition of 1910 : A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications* ,Masaie Matsumura, Eureka

Press ,2011, Volume 3， p.231.

27 Ibid.,p.232.

28 前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、330頁。

29 *Official Report of the Japan British Exhibition* ,op.cit.,pp.222-223.

30 前掲「セントルイス万博における展示とその評価」145頁。

31 前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、488頁。

32 *Official Report of the Japan British Exhibition* , op.cit.,pp.239-240.

33 Ibid.,p.241.

34 Ibid.,p.109.

35 *Official Report of the Japan British Exhibition* , op.cit.,p278.

36 Ibid.

37 Ibid.,p.277.

38 前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、473頁。

39 *Official Report of the Japan British Exhibition* , op.cit.,p.278.

40 Ibid.,p.214.

41 前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、470頁。

42 *Official Report of the Japan British Exhibition* , op.cit.,p.239.

43 Ibid.,p.240.

44 天南生「成功させる台湾喫茶店（上）」『台湾日日新報』1910年 9 月27日。

45 天南生「成功させる台湾喫茶店（下）」『台湾日日新報』1910年 9 月28日

46 *Official Report of the Japan British Exhibition* , op.cit.,p.240.

47 田原生「日英博閉会」『台湾日日新報』1910年11月27日。

48 前掲日英博覧会事務局事務報告』上、124頁。

49 *Official Report of the Japan British Exhibition* ,1910, op.cit.,p.270.

50 Ibid.,pp.109-110.

51 Ibid.,p.110.

52 『明治四十五年大正元年外国貿易概覧』大蔵省主税局、390頁

53 同上350頁

54 「新旧日本」『国際ニュース事典外国新聞に見る日本』第 4 巻、株式会社毎日コミュニケーションズ1993年、296頁。

55 「イギリスと日本」前掲『国際ニュース事典外国新聞に見る日本』310頁。

56 *The World's Work, June 1910,A Japanese Number,The Japan-British Exhibition of 1910： A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications* , Masaie Matsumura, Eureka Press ,2011, Volume 5， pp.65-66.

57 「日英貿易（一）最近三箇年の比較」『神戸又新日報』1912（明治45）年12月23日。

写真１　*Official Report of the Japan British Exhibition,1910,at the Great White City, Shepherd's Bush,London ,The Japan-British Exhibition of 1910：A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications* ,Masaie Matsumura, Eureka Press ,2011, Volume　3，p.228.

写真２　Ibid.,p.226.

写真３　Ibid.,p.254.

.